

# 金沢都心部の夜景創出 －照明プロジェクト「月見光路」－

The design of a nightscape for the center of Kanazawa -Lighting project "Tsukimi Koro"-

川崎 寧史<sup>1</sup>・金谷 末子<sup>2</sup>・宮下 智裕<sup>3</sup>・下川 雄一<sup>4</sup>

<sup>1</sup>正会員 博（工） 金沢工業大学環境・建築学部建築系（〒921-8501 石川県野々市町扇が丘7-1）

kawasaki@neptune.kanazawa-it.ac.jp

<sup>2</sup>博（工） 金沢工業大学環境・建築学部建築系（〒921-8501 石川県野々市町扇が丘7-1）

suekok@neptune.kanazawa-it.ac.jp

<sup>3</sup>博（工） 金沢工業大学環境・建築学部建築系（〒921-8501 石川県野々市町扇が丘7-1）

miya@neptune.kanazawa-it.ac.jp

<sup>4</sup>博（工） 金沢工業大学環境・建築学部建築系（〒921-8501 石川県野々市町扇が丘7-1）

shimo@neptune.kanazawa-it.ac.jp

This paper describes the planning and design of the lighting project “Tsukimi Koro” in the center of Kanazawa. This is a collaborative work involving Kanazawa Institute of Technology, city residents, and other groups. First, the inner city problems that form the background of this project are described. Next, the making of the master plan of the lighting project is outlined. In this plan, 4 kinds of lighting were proposed (foot lights, architectural facade lighting, lighting tower, garden of lighting), and the compositions considered the nightscape of the site. The report concludes with the details of the design and its effects as illustrated by photographs.

**Key Words:** nightscape, lighting project, urban design, design education

## 1. はじめに

夜景の演出は、伝統的な祭事をはじめとして、都市のライトアップに至るまで様々なかたちで実施されてきた。近年では特に、都市の夜間利用促進や観光を目的として数多くの照明プロジェクトが企画されている。本稿では2004年より2年度実施された金沢都心部での照明プロジェクト（以下、月見光路）について、都市夜景の創出や照明デザインの観点から報告を行う。

月見光路は都心部活性化を背景としたまちづくりプロジェクトの範疇にある。ただし、社会実験のように明確な調査分析や啓蒙を目的としていたわけではなく、むしろ地域依頼のイベント企画に近いものであった。しかし、その演出的な効果から継続企画としての要請や期待が高まり、その社会的意義や運営方法が問われるようになってきている。

一方で、月見光路は大学のデザイン教育を主体としたプロジェクトでもある。建築系のデザイン教育では、家具やオブジェなどを制作し、スケール感覚を身につけさ

せることが一般的に行われている<sup>注1)</sup>。この理由から、月見光路の企画をデザイン教育の一環として取り入れることは、むしろ教育効果としては望ましいと判断された。しかし、月見光路の長期継続には、地域参加の促進や大学負担の軽減などの問題が生じてきており、カリキュラムにおける教育プロジェクトもしくは地域連携プロジェクトの制度化も検討され始めている。

つまり、月見光路は企画イベントに端を発したが、地域の期待から継続的なまちづくりイベントへ、また大学教育のあり方から制度化された教育プロジェクトへとその内容を変質させようとしている。そして、その動きが地域と大学の相互にとって良好な関係へと発展していくことが望まれる。このような発展経緯と今後の取り組み姿勢が本プロジェクトの大きな特色といえる。その意味から、本報告が大学を中心とした地域活性化のデザイン活動事例として、その課題に対する取り組み姿勢とともに参照されるならば、本稿をまとめる一つの価値になると考えている。



図-1 金沢城石川門



図-2 京都東山花灯路

## 2. 都市の夜景

### (1) 都市活動と夜景

都市の高度化は照明の集積をもたらすため、恒常的な夜景が創出される。例えばニューヨークのような大都市では、遠望としての摩天楼やタイムズ・スクウェアの街角など、様々な景域での夜景を同時に見せている。また地方都市においても、伝統的建築（図-1）や橋梁など街のランドマークに対する恒常的な照明が実施され、地域性を醸し出す夜景が演出されている。都市における照明プロジェクトの企画は、このような都市固有の夜景をベースとして、特設の照明が相乗的なデザイン効果を生み出すように設計される（図-2）。

### (2) 祭事と夜景

都市や地域で行われる祭事では非日常的な夜景を演出することが多い。そこでは雪洞や電飾のみならず、山焼きや松明、蝋燭を用いた様々な発光により夜景が演出される。このような祭事は伝統的に継承されているものと、現代に企画されたものがある。小規模のものは地域文化として、また大規模なものは観光資源の意味合いも含めて企画あるいは継承されている。ただし京都・大文字の送り火のように、本来の盂蘭盆の習俗から観光行事化したものは、都市化による共同体の解体などと絡んで、行事の遂行や継承などに大きな問題を残している<sup>注2)</sup>。つまり祭事には運営組織と資金の充足、地域や市民の理解が必要であり、これらを存続基盤として良好に実施されなければならない。本稿で報告する月見光路も同様の問題を抱えており、その解消が今後の課題となっている。

## 3. 「月見光路」の企画背景

### (1) 金沢の都市問題

金沢市は人口約45万人の地方中核都市であるが、周知のように能登や富山を含む加賀百万石の中心地としての存在が大きい。またこの地域は戦災に見舞われなかったことから、都心部でも近世から現代までの約400年にわたる歴史的建造物が混在した特色ある街並みを残す。し

かし石川県庁舎や金沢大学の移転に伴う空洞化が進み、都心部の夜間利用は減少の傾向にある。金沢都心部の空洞化は年々深刻な都市問題となっており、商業地区の香林坊（約15%）や金融地区の南町（約20%）でも業務ビルの空室率は高くなっている。

「月見光路」の対象地区は、この香林坊から兼六園までの間の広坂商店街の界隈を中心としている。ここは香林坊の商業地区に加えて、石川県庁舎（旧）や金沢市役所などの行政地区、かつての旧制第四高等学校や金沢大学などの文教地区の集まった場所であった。しかし、近年の金沢大学・付属学校の移転、さらには石川県庁舎の移転が重なり空洞化に拍車がかかっており、広坂商店街や南に隣接する柿木畠商店街の衰退もはじまっている。これに対して、2004年の21世紀美術館の開館や旧県庁舎の再利用、金沢創造都市会議・金沢学会の創設など、都心部の再活性化につながる試みが数多く行われるようになった。特に、21世紀美術館は22時までの開館となり、この地域に対する夜間の人の流れに変化がおきている。以上のような状況が、「月見光路」実施のきっかけを与えた背景となっている。

### (2) 金沢創造都市会議

金沢経済同友会創立40周年記念事業として、金沢において経済、文化、都市などの諸問題をテーマにした継続的な国際会議（金沢ラウンド）の開催が提案された。この企画に議論を重ね、1999年に第1回の金沢創造都市会議が開催された。金沢創造都市会議は金沢学という企画会議と隔年で開催されたが、2002年の金沢学では芝浦工業大学・大内浩教授から「金沢の夜景をデザインする」<sup>注3)</sup>という提案がなされた。この提案を受けるかたちで、2003年11月には金沢工業大学・金谷末子教授（建築系、光環境学）を中心とした照明社会実験<sup>注4)</sup>が実施され、2004年の「月見光路」の企画実施に繋がった。

## 4. 運営体制

### (1) 主催・後援組織

「月見光路」は金沢中心街まちづくり協議会・金沢工業大学・広坂振興会が主催し、石川県・金沢市・金沢創造都市会議・(株)金沢商業活性化センターが後援することとなった。また地元電設企業の協力を得ている。

この中で、照明デザインの制作や配置は金沢工業大学建築系の教員と学生が、また配線や発電は地元電設企業と金沢工業大学が共同で行った。広坂振興会や金沢中心街まちづくり協議会は、運営費提供に加えプロジェクトの段取りや公的機関との各種調整などの援助を行った。

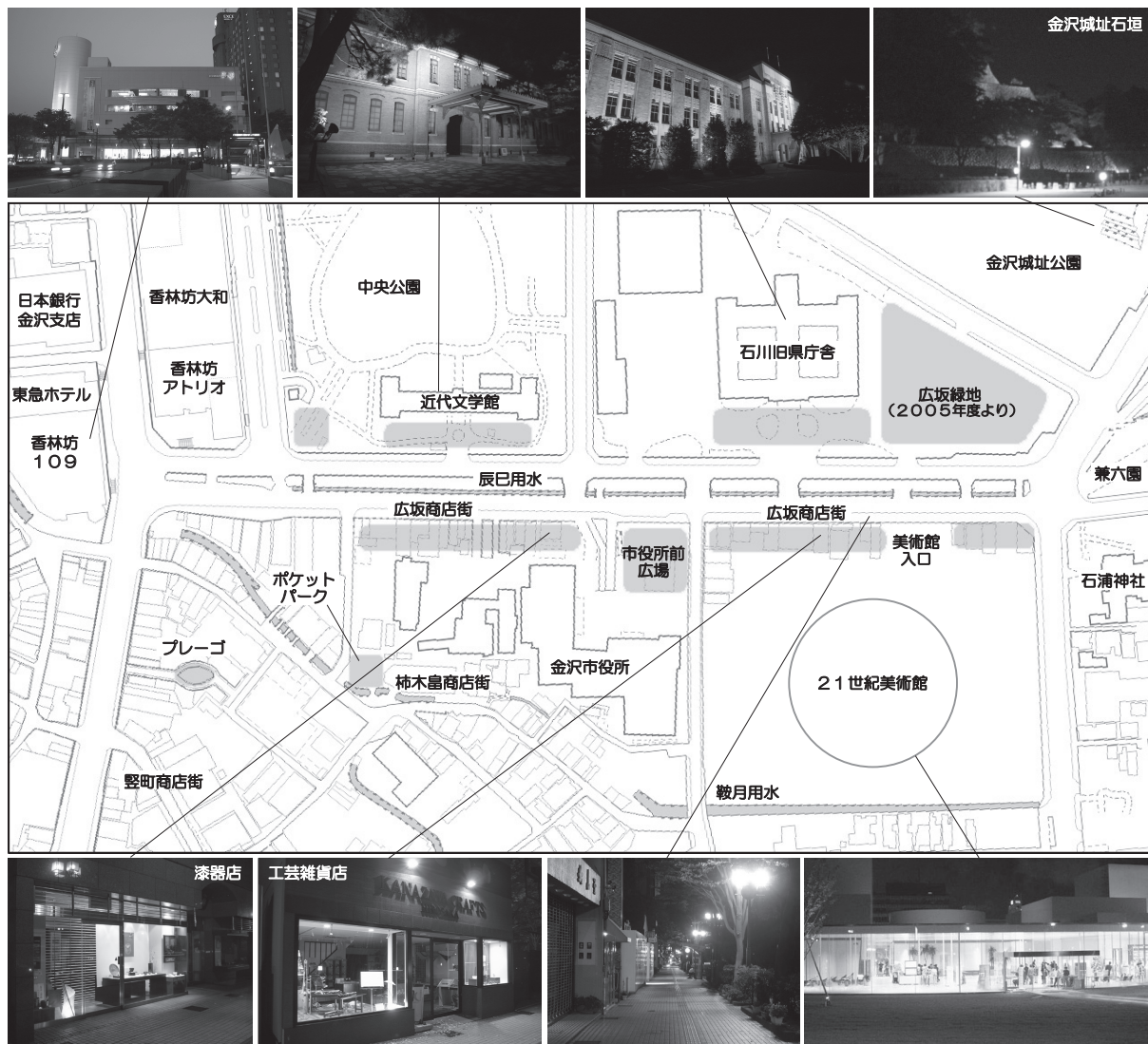


図-3 広坂界隈の都市空間と夜景

## (2) 照明デザインの制作体制

前述したように、照明デザインの制作は金沢工業大学工学部建築系（現、環境・建築学部建築系）の教員および学生の手により行われた。教員の内訳は教授・金谷末子（光環境学）を代表とし、助教授・川崎寧史（建築計画・景観工学）、下川雄一（建築計画・建築CAD）、講師・宮下智裕（建築設計・構法デザイン）がデザイン制作のスタッフとして参加した。2004年度は教授・土田義朗（音響心理）による効果音の設置もあった。学生は各教員のゼミ生（4年生・大学院生）に加えて1年生から3年生までの自由参加とし、延べ約100名の参加を見た。「月見光路」プロジェクトは課外活動として、正規の授業時間外で実施された。その他、金沢工業大学からは運営費援助に加えて、広報や施設提供などの協力が行われた。

## (3) プロジェクト日程

照明デザインの制作は金沢工業大学建築系教員・学生が主体となっている。制作プロジェクトの日程は、4月にプロジェクトメンバーの公募を行うと同時に、プロ

ジェクト実施に向けて関係諸団体との調整が開始される。8月までに教員を中心としてプロジェクトの主題やサブテーマ、マスタープランの大枠が検討され、9月以降に学生を中心としてデザイン・スタディおよび制作が行われる。このように約半年間を要する課外活動のプロジェクトとなっている。

## 5. 「月見光路」の主題と夜景演出

### (1) 「月見光路」の主題と計画

初年度の照明プロジェクトの会期は、21世紀美術館開館を記念とした2004年10月中旬の週末を含む4日間に設定された。この時期は夜間の散策に風情を残す季節でもあり、できるだけ多くの市民に広坂界隈に出向いてもらう意図が含まれている。この理由から、プロジェクトを「月見光路」と命名し、あかりの路に導かれて街中で月見を楽しんでもらうことが基本的なテーマとなった。



## (2)照明計画のマスタープラン策定作業

初年度である2004年は広坂通り界隈をあかりの路とし、月見の広場を演出するための照明計画マスタープランが必要となった。そこで広坂界隈の空間把握、夜景の現況、金沢らしさのイメージ、既存事例による夜景演出法などを同時に検討し、マスタープランの策定を進めた。

### a) 広坂界隈の都市空間

広坂界隈は香林坊から兼六園下までの国道10号線(通称、百万石通り)の南側沿道約400mに位置し、その西南には隣接して柿木畠地区がある。香林坊は大型商業店舗や都市型ホテル、日本銀行金沢支店といった大規模建築が建ち並ぶ現代都市空間である。ここから百万石通り沿い北側には石川近代文学館(旧制四高、明治期)、石川旧県庁本庁舎(大正期)が並び、その背後には金沢城址(近世)の石垣が見える伝統的な雰囲気通りとなっている。また南側は九谷焼店舗などを代表としたの広坂商店街が並び、金沢市役所、21世紀美術館、兼六園下、石浦神社(天平期創建)へと繋がっている。さらに南西には柿木畠地区があり、飲食店の小店舗が密集する界隈が展開している。広坂通り中央分離帯には藩政期に作られた辰巳用水が流れており、また柿木畠地区には同じく藩政期の鞍月用水が流れている。

都市空間としては、沿道の歩道や広見、さらには公共施設前の広場などにより、流れや滞留、さらには石垣や階段などの高低差が随所に見られ、これらが百万石通りを主軸として繋がりを見せている。図-3の中に図示した網掛け部分は、このような都市空間の繋がりやスケールを示している。

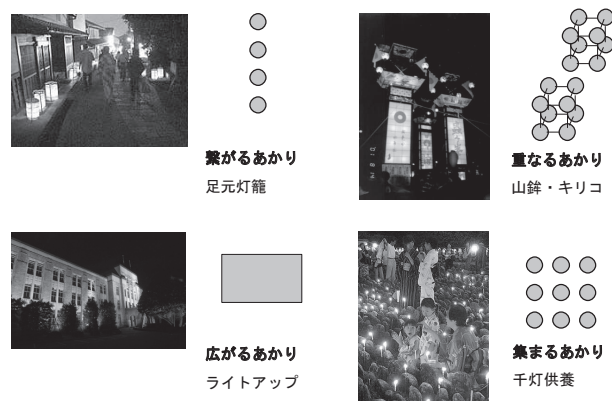


図-4 夜景演出法の整理

表-1 あかりの演出とデザイン要素

あかりの演出	→ 誘発行動	デザイン要素
「繋がるあかり」	→ 歩を誘う	「あかり路」「あかり草木」
「重なるあかり」	→ 歩を休める	「あかり山」
「広がるあかり」	→ 歩を休める	既存の壁面ライトアップ
「集まるあかり」	→ 歩を止め月見を楽しむ	「あかり庭」

### b) 広坂界隈の夜景

広坂界隈は前述したような都市空間や景観資源で構成されている。そのため夜間は香林坊付近の大規模建築や小規模店舗群の現代的な夜景に加えて、石川近代文学館や石川旧県庁舎の恒常的な壁面ライトアップ、また最近では21世紀美術の新しい夜景も出現した。2005年に旧県庁本庁舎の東側にある石川県警察本部などの公共建物が公園化(広坂緑地)されたため、背後にある金沢城址石垣のライトアップが旧県庁舎付近から直接望めるようになった。このため百万石通りを境に北側は伝統的な雰囲気を持つ夜景が、また南側は現代的な都市の夜景が展開されている。以上は図-3中に写真で示している。

### c) 金沢らしさのイメージ

前年度(2003年)に実施された照明社会実験のアンケート<sup>注5)</sup>からは、夜景には「金沢らしさ」のイメージを求める意見が見られた。この「金沢らしさ」に対するイメージには、九谷焼や兼六園といった特定の加賀文化も散見されたが、多くは和風イメージという抽象的な内容で終わっている。さらに夜景に対する自由回答では、金沢の街並みを意識したものが多く、市民意識としては照明と広坂界隈の街並みの調和が求められることが分かった。このため2004年は秋の風情を表現する和風の照明デザインを、また2005年は雪つりや金沢城址の石垣、さらには九谷焼で用いられる加賀五彩などの金沢・加賀文化を意識した照明デザインのテーマを設定した。これらについての詳細は第7章で記す。

### d) 夜景演出の方法

伝統的な祭事の事例を中心に、夜景演出の方法について検討した。その結果、①足元灯籠の配列による「繋がるあかり」、②山鉦やキリコの設置による「重なるあかり」、③壁面ライトアップによる「広がるあかり」、④千灯供養などに見られる「集まるあかり」の4項目が整理された(図-4)。行動の誘発としては、「繋がるあかり」で歩を誘い、「重なるあかり」「広がるあかり」で歩を休め、「集まるあかり」で歩を止め月見を楽しむことを想定した。またそれぞれのあかりの演出方法と誘発行動に対応して表-1のような4つのデザイン要素を想定し、表-2のような具体的な夜景演出のイメージを検討した。同時に、広坂・柿木畠地区の空間的文脈を解釈し、これら4項目のデザイン要素を適宜組み合わせながら(図-

表-2 デザイン要素と演出

あかり草木	草木の自然な形、ゆらぎを表す光 あかり草木が光の野をつくり、あかり庭に誘われる
あかり路・あかり山	道行く人々をいざなう大小の光 連なる灯籠が歩を誘い、あかり山で足を止める
あかり庭	人々がたえずむ幻想的な光と月光の協奏 ライトアップの前面に広がるあかりの庭で月見を楽しむ



5), 月見光路のマスタープラン (図-6・7) を策定するコンセプトを打ち立てた。

## 6. 月見光路マスタープラン

### (1) 2004年マスタープラン「神無月の夜長に街を歩く」

2004年はサブテーマを「神無月の夜長に街を歩く」とし、香林坊から広坂・柿木畠地区に自然に足を運ばせ、クライマックスとして旧県庁舎前広場で月見を楽しませる計画とした(図-6)。「あかり路」・「あかり草木」・「あかり山」・「あかり庭」および壁面ライトアップの構成は図-6中に示すとおりである。マスタープランの概要は以下のような内容となる。まず広坂地区(中央公園入り口・

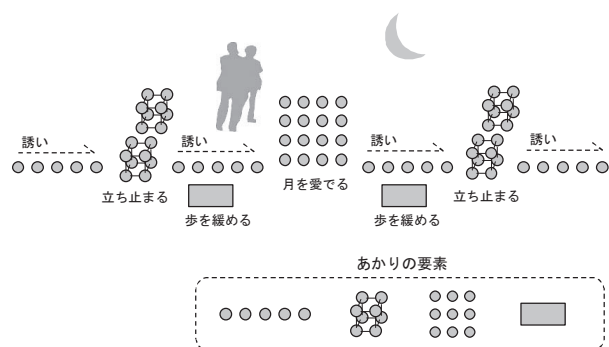


図-5 デザイン要素の構成と誘発行動

市役所前広場・21世紀美術館前・兼六園下緑地)の4ヶ所に「あかり山」を設置し、あかりのランドマークとする。そして広坂商店街前の歩道に「あかり路」を、また中央公園入り口から石川近代文学館前広場に「あかり草木」を設置し、兼六園下まであかりの路を繋げる。この途中にある石川近代文学館および旧県庁舎の既存のライトアップを利用し、あかりの繋がりに変化を持たせる。旧県庁舎前広場に「あかり庭」を設置し、月見を誘発させる空間を創出し、月見光路のクライマックスとする。これに加え、柿木畠地区小公園とプレーゴ広場の2ヶ所に「あかり路」・「あかり草木」・「あかり山」を組み合わせ、あかりのポケットパークを演出した。

### (2) 2005年マスタープラン「月の前に一夜の友」

2005年は広坂地区のみが演出対象となった。2004年との相違点は、「あかり山」や「あかり草木」を1ヶ所に集中配置し、「あかり庭」とは雰囲気異なるあかりの拠点を3ヶ所演出した(図-7)。具体的には、旧県庁舎前広場に「あかり山」5基を集中設置し、背景の壁面ライトアップと重ねてあかりの広場を演出する。また市役所前広場の階段部分に「あかり草木」25基を集中配置し、あかりの金屏風を演出する。中央公園入り口には雪つりをイメージした新規の「あかり山」の設置を行う。そして旧県庁舎東側の広坂緑地には、背景に見える金沢城址石垣の造形と調和した「あかり庭」を創出し、月見光路の

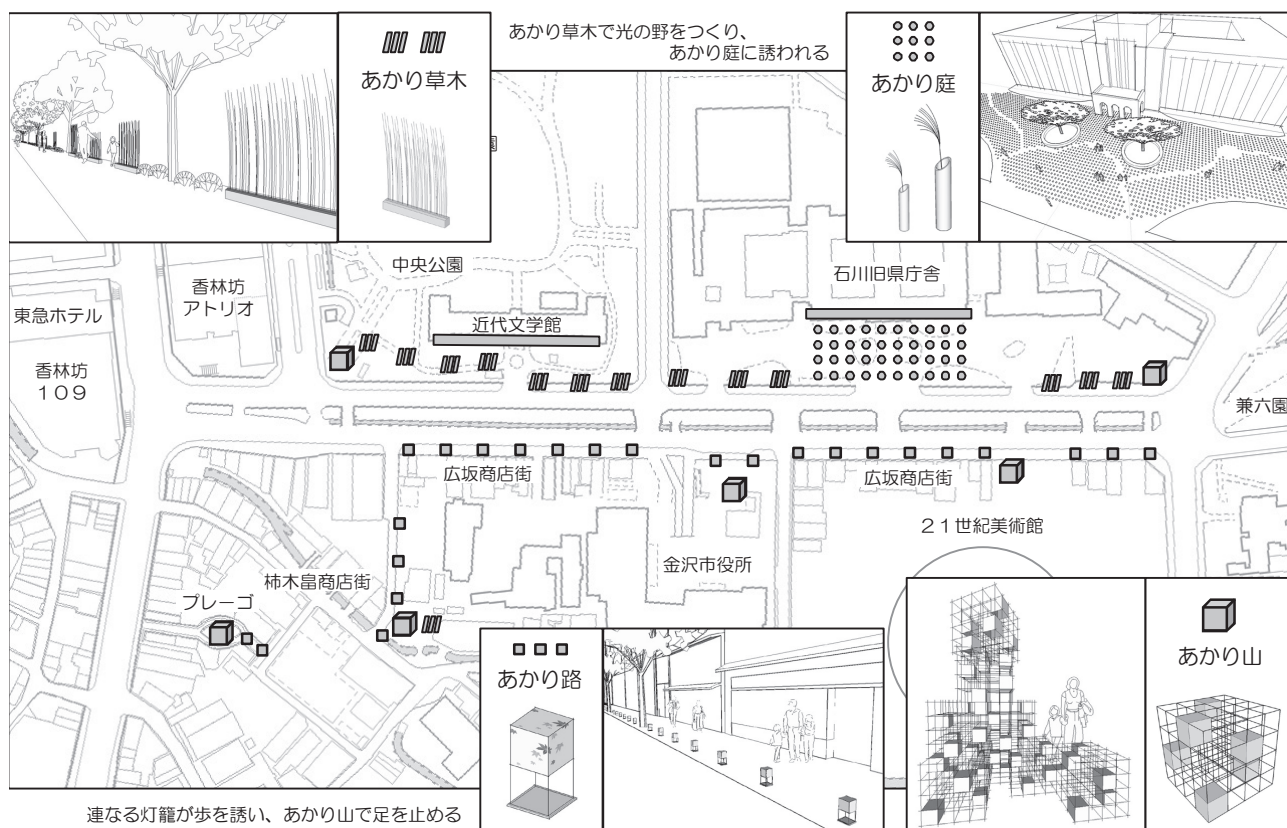


図-6 2004年マスタープラン

クライマックスとする。ここでは、「かぐや姫が月に帰る階段」というストーリーを想定し、月に向かって螺旋状に昇華するあかり空間の造形をイメージしている。

## 7. 照明デザインの制作と設置

### (1) デザイン制作と設置 (2004年)

デザイン・コンセプトは和風あかりの創出とし、和紙や木、竹といった素材で「あかり路」「あかり草木」「あかり山」「あかり庭」のそれぞれのオブジェを制作することとした。それぞれの造形イメージは先に述べた「夜景演出法の整理」(図-4)に基づき、「あかり路」は足元灯籠、「あかり山」は山鉾やキリコ、「あかり庭」は京都・化野の千灯供養をモチーフとした。また「あかり草木」は風に揺れる黄金の稲穂や草木をイメージしている(図-8)。デザイン制作の分担は、あかり山・あかり路は川崎チーム、あかり草木は下川チーム、あかり庭は宮下チーム、照明演出は金谷チームがそれぞれ担当した。これらを2004年マスタープラン(図-6)に基づいて設置し、広坂・柿木畠境界一体を回遊性のある空間として繋げた。以下ではこれらの詳細を記す。

#### a) あかり山

細い竹籤で450mm立方のフレームを組み、さらに内部を150mmグリッドで分割した。この竹籤による立体グ

リッドの内部に、耐水性和紙(ワーロン紙)によって包まれた白熱灯を設置した。和紙には月見・紅葉・秋桜・祭り・華・蝶といった6つのテーマの伝統的な絵柄をプリントし、点灯時には透かし絵として浮かび上がる様に工夫している。この450mm立方のフレームを1ユニットとして、6~7ユニットを立体的に組み合わせることにより「あかり山」を制作した(図-9)。あかり山は絵柄のテーマに合わせて6基制作し、広坂・柿木畠地区の6ヶ所に設置した。細いフレームによって支えられた灯籠は暖かな光を放ち、空中に浮かんでいるかのような軽やかさを生み出した。

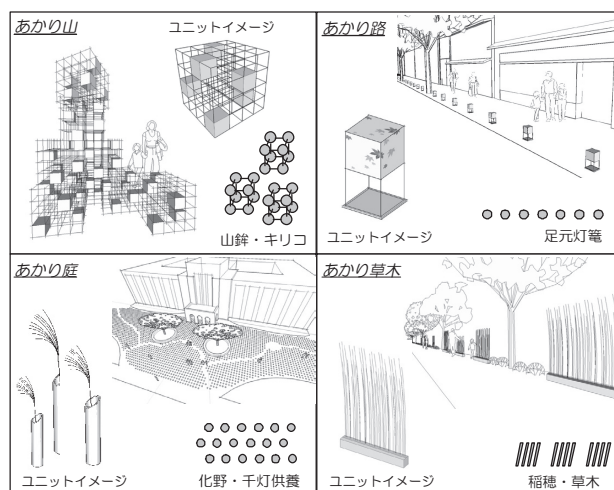


図-8 デザイン要素と造形イメージ

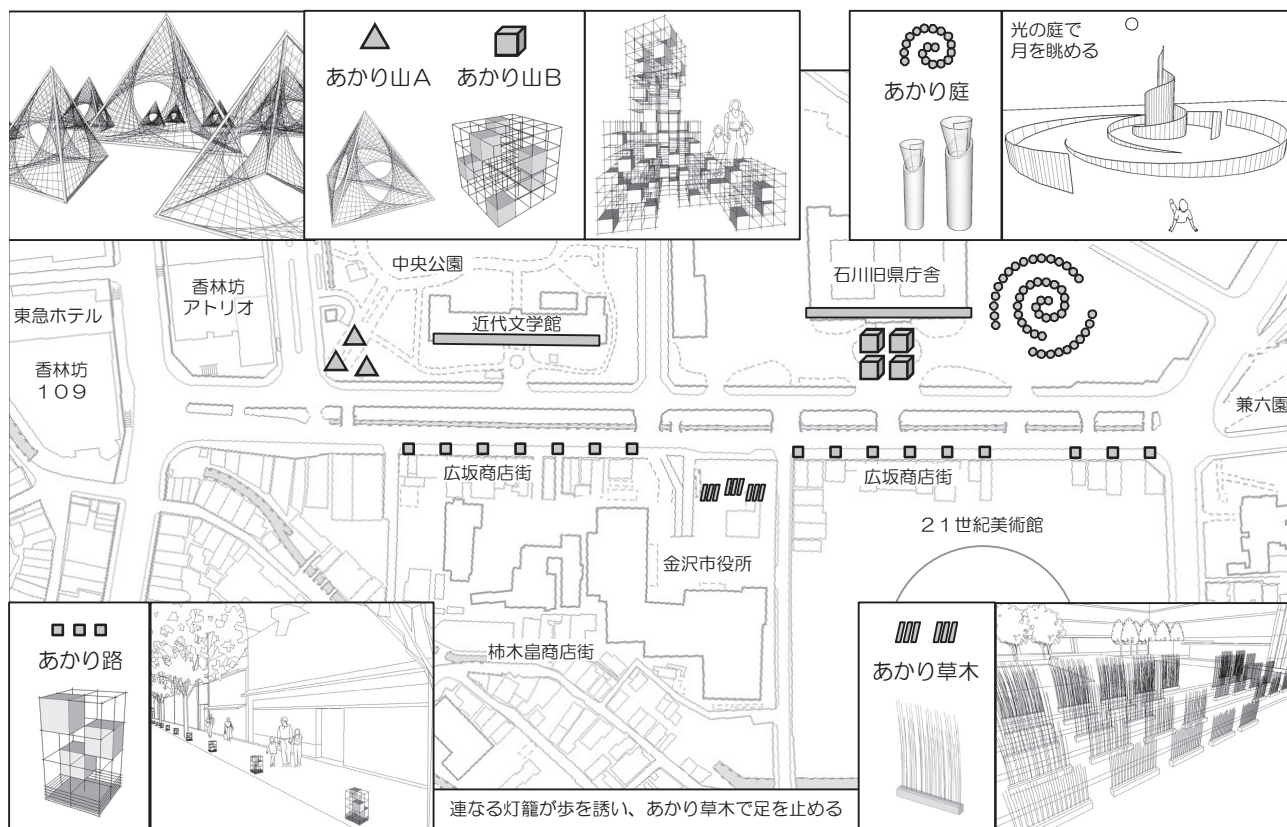


図-7 2005年マスタープラン



#### b) あかり路

竹籤で150mmフレームのユニットを組み、これを2つ組み合わせて足元灯籠を作成した。照明は「あかり山」と同様に、耐水性和紙（ワーロン紙）によって包まれた白熱灯を設置し、透かしとして絵柄をプリントしている（図-10）。このように「あかり路」は「あかり山」の最小グリッドをモジュールとしており、さらに絵柄を「あかり山」のテーマと合わせることで、「あかり山」との組み合わせや繋がりに対するデザイン的な調和が図られている。この「あかり路」を広坂商店街前歩道に約2m

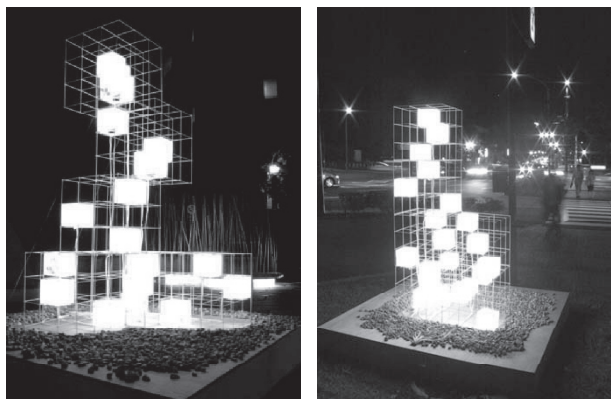


図-9 あかり山・柿木畠（左）兼六園下（右）（2004）



図-10 あかり路と山・21世紀美術館前（2004）

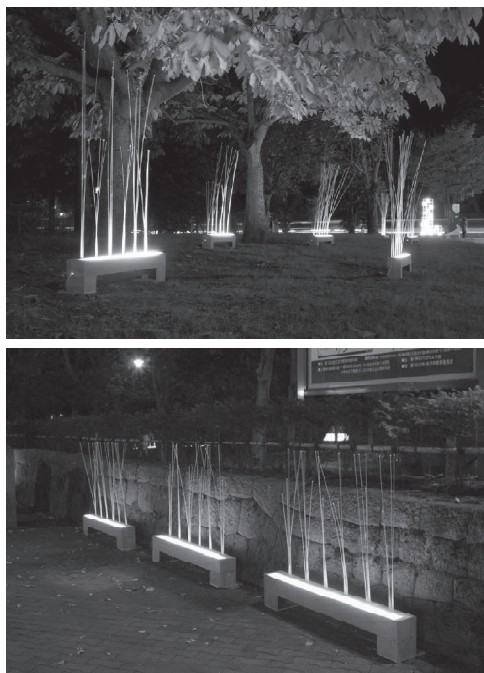


図-11 あかり草木・近代文学館（2004）

ピッチで60個設置し、香林坊から兼六園下までの線的なあかりの繋がりを創出した。

#### c) あかり草木

中央公園入り口・石川近代文学館から旧県庁舎・兼六園下までの、百万石通り北側の伝統的な雰囲気を持つ沿道空間をあかりの草木で繋げた。この「あかり草木」は秋風に揺れる草木の枝や稲穂をモチーフとしてデザインされた。蛍光灯を組み込んだ木製箱の上部を耐水性和紙（ワーロン紙）でカバーし、その中に下端部のみ固定した竹籤を並べて配置した（図-11）。風によって緩やかに揺れる竹籤に和紙を通した光が当たり、金色に輝く草木に見える。これらのユニットを石川近代文学館前広場の石垣や樹木の間に配置することにより、草木だけでなく周囲の自然なども間接的に照らされるような静かなあかりの演出とした。

#### d) あかり庭

旧県庁前広場に約1000本の竹灯籠を配し、月見のためのススキ野原を演出した。250本の竹材を400mmから120mmまでの5種類の寸法に切断し、約1000本の竹灯籠を作成した。この内部に1000本の懐中電灯型LEDライトを設置し、独立した照明オブジェとして竹灯籠から幻想的なあかりを照らし出した。庭園の演出としては、白色LEDの竹灯籠を満月に模した円形に配置し、その周囲を取り囲むようにアンバー（黄色）LEDを使った竹灯籠を配置した。さらに、この周囲の竹灯籠にはススキを加え、下方からススキ野がライトアップされるように演出した（図-12）。訪れた人々は、このススキ野原の空間を散策し、自然に満月に近づいて行くような動線計画となっている。青白い月の輝きと、金色に光るススキ、さらには背景となる旧県庁本舎のライトアップと重なり合って、

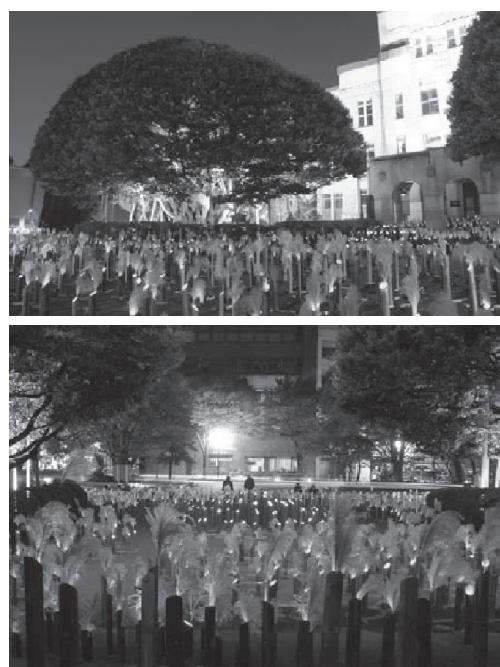


図-12 あかり庭・旧県庁舎前（2004）



幻想的な夜景庭園を作りだしている。

## (2) デザイン制作と設置 (2005年)

前年度の成果を踏まえて、基本的なデザイン・コンセプトを踏襲しながらも、設置空間の特性を引き出すデザイン、またより金沢らしさを演出するデザインを試みた。例えば北陸特有の景観である「雪つり」や九谷焼の加賀五彩を、あかり山やあかり路のデザインに応用した(図-13)。このような新規の照明デザインに加えて、2004年に制作した照明オブジェをできる限り再利用し、その構成や空間配置に変化を持たせることで、前年度とは異なったあかり空間を創出している。例えば、あかり草木では市役所前広場の階段スペースを利用し、金沢箔の金屏風をイメージした配列を提案している。デザイン制作の分担は、あかり山は川崎チーム、あかり路・あかり草木は下川チーム、あかり庭は宮下チーム、照明演出は金谷チームがそれぞれ分担した。

### a) あかり山

前年度に用いた「あかり山」の照明ユニットを旧県庁前広場に集積させ、立体的で華やかなあかり空間を創出した。旧県庁本庁舎のライトアップ・ファサードに合わせて、「あかり山」5基をシンメトリーな形態と配置で構成し、多数の光に囲まれながら旧県庁のエントランスへと導かれる空間を作り出している(図-14)。

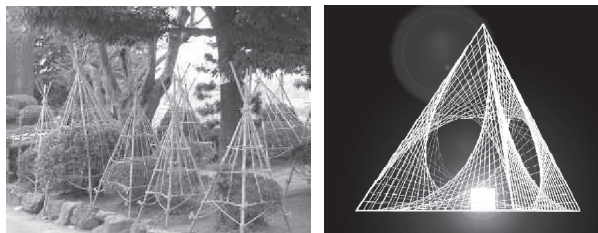


図-13 雪つり (左) をモチーフにした照明デザイン



旧県庁舎ライトアップと  
調和したシンメトリーな  
あかりのゲート



図-14 あかり山・旧県庁舎前 (2005)

一方、中央公園入り口部分には新規のあかり山を配置した。ここは香林坊地区の現代的都市空間と隣接していることから、和風モダンなデザインをテーマとした。そこで北陸特有の雪つりの景観イメージを想定し、三角錐の木造フレームに木綿糸を幾何学的に編み合わせ、あかりの線織面が浮かび上がるデザインとしている。木造フレームは1200mm (大)・900mm (中)・450mm (小) の3種類とし、合計18基の照明オブジェを作成した。大型のオブジェ3基を中心に、中・小型のオブジェ15基をその周囲に空間配置した(図-15)。

### b) あかり路

前年度の足元灯籠の150mmユニットを4×3に立体構成したフレームを基本として、この中に3基の白熱灯を設置した。照明カバーは前年同様ワロン紙を用いたが、ここでは九谷焼で利用される加賀五彩(えんじ・黄土・藍・草・古代紫)という5つの伝統色を無地で用い、これらの組み合わせによる様々な色のあかりの路を演出した。また、土台部には金沢の面格子をイメージした台座



図-15 あかり山・中央公園入り口 (2005)



加賀五彩の雪洞が色とりどりのあかりを放つ

図-16 あかり路・広坂商店街 (2005)

を設け、内部には白黒の玉石を敷いて重心としている(図-16)。

この「あかり路」を広坂商店街前歩道に約4mピッチで30個設置した。また2005年には広坂商店街の各店舗に好きな色の「あかり路」を選択させ、個々の店舗前に設置させるという試みを実施した。これには月見光路に対する地域参加の意識向上という意図があった。

#### c) あかり草木

前年度に用いた「あかり草木」を市役所前広場に集積させ、新たなあかりのイメージを生み出す試みを行った。広場内にある階段状の通路空間を利用して、「あかり草木」のユニット25基を4段の列状に集中配置し、夜景に浮かび上がる金沢箔の金屏風のデザイン空間を演出した(図-17)。ここは通行量の多いエリアであるため、十分な動線空間も確保しながら日ごとにその配置を変え、夜景の変化を楽しめる工夫も同時に行っている。

#### d) あかり庭

設置場所が旧県庁前広場から隣接の広坂緑地へ移行し、空間的広がりを持つ公園がロケーションとなった。このような広々とした場所に設置するオブジェに対しては、シンボリックな造形とともに昼間でも楽しめる遊び空間の創出(図-18)がテーマとなった。さらに、背景には金沢城址の石垣や兼六園の緑地が控え、伝統的風景との調和も配慮する必要性が生じた。特に金沢城址の石垣は、基壇状に重なる角部分がライトアップされており、この背景と同調した光の造形をテーマとした。

そこで、天に向かって螺旋状に延びていく階段のように竹筒を配置し、その中央に投光器による光の柱を立て、

巨大遊具のような照明空間を作り出した(図-19)。これには「かぐや姫が月に帰る階段」というストーリーを設定し、金沢城址の石垣に浮かぶ月と重ね合わせることで、童話のシーンのような幻想的な夜景を生み出している。照明装置は投光器の他に懐中電灯型LEDライトを利用し、約2000本の竹灯籠の内部から柔らかなあかりを照らし出している。

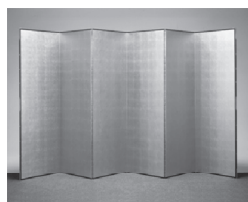
### 8. まとめと課題

本稿では照明プロジェクト「月見光路」の企画背景や実施内容について、デザイン演出に至るまで詳細に報告してきた。この照明プロジェクトを通して、日中に利用される機能的な都市空間とは大きく異なり、あかりを利用して独特な情緒的空間を演出できることが実感できた。また同時に、企画的な夜景演出は都心部においても散策や鑑賞といった文化的行動を積極的に誘発できることが確認でき、特に金沢のような文化・観光都市には適した



昼間は遊具のような空間となる

図-18 あかり庭 昼景 (2005)



階段広場を金沢箔の金屏風(上)のように演出している

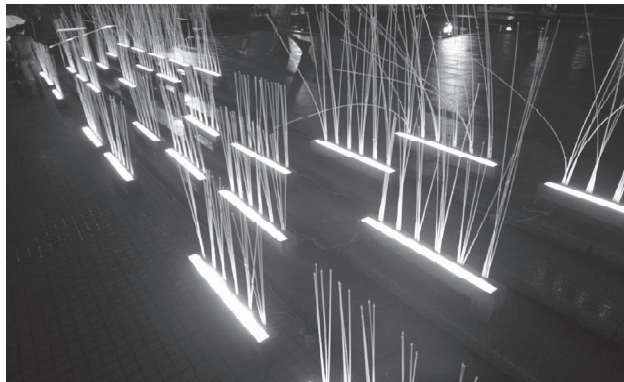


図-17 あかり草木・市役所前階段広場 (2005)



金沢城址の石垣ライトアップ(下)と重なる



図-19 あかり庭・広坂緑地 (2005)



企画であると考えている。

### (1) 月見光路のプロジェクト効果

月見光路のデザインや企画に対する市民アンケートを実施していないため、客観的なプロジェクト効果を示すことは困難である。ただし、散発的ではありながら、新聞紙面<sup>注6)</sup>やインターネット<sup>注7)</sup>などで市民の感想を確認することができる。これらはいずれもプロジェクトに対して好印象であり、夜景の演出や広坂界限の散策を期待し楽しむ内容となっている。会期中には広坂界限の店舗やホテルに独自の案内パンフレットが設置され、県外からの観光客も少なからず月見光路に足を運んでいる。

2006年には社団法人金沢青年会議所からの依頼があり、7月末に開催される「金澤夕ぐれ祭り」(主催:金沢青年会議所、後援:石川県・金沢市・大学コンソーシアム石川)への出展が決定された。ここでは小学生以下の子供たちが作る1万本のキャンドルライトと、月見光路の照明オブジェのコラボレーションが企画されている<sup>注8)</sup>。また、県外にあるエクステリア製造会社から助成の申し出を受け、製品デザインの参考事例となっている。以上のように、新聞紙面<sup>注6)</sup>からは高齢者、またインターネット<sup>注7)</sup>からは若者の声を聞くことができ、さらに「金澤夕ぐれ祭り」では子供たちの作品と共同できる<sup>注8)</sup>など、月見光路は3年目をむかえて市民が親しむ企画として一応の定着を見せはじめている。

### (2) デザインの継承と発展

継続型の都市企画では、時節を思い出すイメージの継承と、新規性や意外性の両面を併せ持つ必要があると考えている。照明デザインに関しては、基本形態もしくはユニットの設定が重要であり、あかり演出のデザインベースを残していくこと、またこれを柔軟に構成しながら年度毎に変化を持たせていくことが必要と考える。基本形態やユニットが設定されていれば、あかり山や庭などの再構成や設置空間に合わせた再配置が可能になると同時に、月見光路のイメージが大枠で継承されていくことになる。また、自由度を許す色彩や形態の部分に、地方文化の要素を間接的に取り入れることで、地域性を演出することも可能となる。以上は2004・2005年の実施

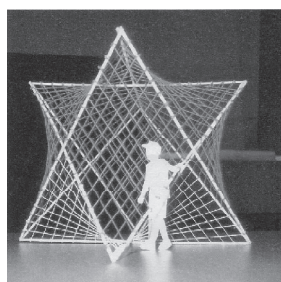


図-20 デザインの継承と発展: 星型オブジェ (2006)

内容から感じたことである。2006年では、前述した「金澤夕ぐれ祭り」の出展に対して、2005年あかり山の三角錐を2対に組み合わせた星型のフレームに幾何学的な線織面を張り、月見光路のオブジェのイメージを継承しながらも、新しいデザインの制作を提案している(図-20)。これは、「金澤夕ぐれ祭り」の会期が7月であり、天の川をテーマに星型のあかりをイメージしたためである。

### (3) プロジェクトの継続と課題

月見光路の事例他がすでに示しているように、都市空間の魅力創出や活性化として夜景の演出は有効な手段である。しかし、恒常的なライトアップは別として、企画的な照明プロジェクトは実施に関わる関係諸団体の同意や労力、また費用負担など検討すべき問題が同時に発生する。「4. 運営体制」で述べた通り、本プロジェクトの照明デザインの制作・設置は金沢工業大学建築系の教員や学生が主体となっている。月見光路の会期は短期間であるものの、デザイン制作や設置規模から見ると大規模なプロジェクトとなっている。運営費用には人件費を見込んでいないことを含めて、月見光路は大学の教育的プロジェクトや関係者のボランティアとしてようやく成立していると言える。広坂商店街や関係諸団体の協力を得ているものの、長期にわたるプロジェクトの運営と継続には、地域参加も踏まえて解決すべき問題が残されている。筆者らは特に、地域の季節行事として月見光路の継続を望むものであり、延いては地方や地域の良質な文化資源として定着していくことを望んでいる。そこで以下では、プロジェクトの実施と継続に関する課題とその対応を簡単に整理し、本稿のまとめとする。

#### a) 教育プロジェクト構想

月見光路のようなプロジェクトは、造形デザインやまちづくりなどの実践的教育として、大学において積極的に実施されることが多い。この場合、教育プログラムは指導教員の判断で組み立てられ、ゼミ活動や課外活動として実施されてきた。一方、全国的な大学教育の動きとして、このような産学連携プロジェクトを正式なカリキュラムとして受け入れることが推奨されている。本学でも教育のプロジェクト化が制度化される方向にある。この場合、「産学連携プロジェクト」もしくは「地域連携プロジェクト」などとして、受託研究についても獲得を目指すことになる。

大学組織としては、職員の参加を通じて顧客(地域)ニーズの把握や外部機関との調整などについて支援を行い、教員や学生の負担軽減を図る。このような教育プロジェクト構想は月見光路の運営や継続に役立つものであるが、同時に関係団体や地域のより深い理解が必要になってくる。大学側も新しい試みとして、その実施には試行錯誤がつきまとう。その中で、2006年からは本学企



画調整部の職員が月見光路をバックアップする体制となり、学内や外部との交渉、資金確保、作業場や輸送手段などの施設確保を広く支援している。このような2004年以降の月見光路を中心とする”灯り”プロジェクトの取り組みが教育的に評価され、文部科学省「平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に「発展する地域連携プロジェクトの実践」として採択された。

## b) 地域参加と協力

広坂商店街からはデザイン制作費用に加え、会期中には各店舗からの電源や倉庫の提供、公共への折衝など多くの協力を得ている。しかしデザインのテーマやコンセプトの設定、デザイン制作や維持・管理に関わる作業は大学主導で実施されている。前項の教育プロジェクト構想でも述べたが、プロジェクト全般に関わる部分で、より多くの地域参加が望めれば、地域の祭事として月見光路が定着していくものと考えられる。この中には、例えばサブテーマの発案、店舗前設置の足元灯籠のメンテナンスやストック保管など、実質的な作業分担も容易に想定できる。これらの作業参加を通じて、照明プロジェクトに対するより一層の親近感や継続に対する責任感を感じていただければ、地域主体の行事として継承されていくものと期待している。

**謝辞:**「月見光路」は、金沢中心街まちづくり協議会・金沢工業大学・広坂振興会および石川県・金沢市・金沢創造都市会議・(株)金沢商業活性化センターなどのご協力をいただき実施できました。さらにデザイン制作では、金沢工業大学建築系学生諸氏の多大な努力の上、ようやく完成に至っております。その他、電設作業をご協力いただいた企業、資材や作業空間をご提供いただきました方々、会期中にご鑑賞さらには貴重なご意見を賜りました市民の方々に対して、ここに深く御礼申し上げます。

## 脚注

- 1) 「デザインスクールの構築に向けたいくつかの試み」、八束はじめ、建築雑誌 JABS200607 vol. 121 No. 1549, 日本建築学会, p. 40, 2006
- 2) この問題は、「川崎寧史 他3名、東山大文字における火床付近の土地所有の大正期以降の変化、都市計画別冊 平成12年度都市計画論文集, No. 35, pp. 703-708, 日本都市計画学会, 2000」で報告されている。
- 3) 金沢創造都市会議・金沢学の内容はホームページで公開されている。「金沢の夜景をデザインする」は次のURLに掲載されている (<http://www.kanazawa-round.jp/kg2002/teian1.html>)。
- 4) 2003年11月に”「金沢らしいあかり」を考える社会実験」と称して、広坂地区において、既成のポール型照明器具設置や建築・街路樹のライトアップなどによる

照明実験が実施された。

- 5) 「金沢らしいあかり」を考える社会実験”において、利用した照明器具や旧県庁舎ライトアップ等についてその印象を一般にアンケートしている。この中で「金沢らしいあかり」について自由記述させている。
- 6) 北國新聞掲載記事:「音楽会と広坂の散策で気分一新」中村礼子 72歳 「先日、佐藤しのぶさんの・・・(中略)・・・会場を出てからも、余韻をたのしみ、市役所前方にできた広場の金沢工大の皆様が作った月見光路にも感動しました。導かれるように拝見し、月の世界に導かれるような気分で、学生さんたちともお話をさせてもらいました。広坂のあかり道を歩きながら、何か私もあきらめず、めげずに努力したい気持ちになりました。」地鳴り(北國新聞読者投稿欄)、北國新聞朝刊、2005年10月23日(日曜日)
- 7) ホームページ掲載記事:「金沢発ときめき浪漫」<http://tokimekiro.exblog.jp/1991595/> (H18年7月現在で確認できる)ブログ形式のホームページであり、16項目の意見交換が掲載されている。この中に例えば次のような意見がある。「金沢っていう場所柄ととてもマッチしているような気がします。光・・・いや、灯りのオブジェ、とても素晴らしかったですね。(後略)」「(前略)あのあたりはずいぶん変わりましたね。金沢の街が城下町にふさわしいものになんて変わっていくのは、地元の者として嬉しいものです。「月見光路」、もっと場所を広げて、金沢の名物の一つにしてほしいですね。」
- 8) 子供たちが制作した1万本のキャンドルライトと月見光路のコラボレーションは、以下のように複数の新聞紙面に掲載された。



平成18年7月30日 北陸中日新聞朝刊掲載

(2006.4.14 受付)